黒部人柱伝説

平　龍生

目次

プロローグ
第一章　雪の殺人者
第二章　首なし死体の謎第三章　黒い雷鳥と魔符第四章　誘拐・殺し舞台第五章　密儀の殺人譜
エピローグ

プロローグ

春はもうすぐそこまでやって来ていた。
北の地の気候とはちがい、東京で迎える春は、小矢部岳男（こやべたけお）にとっては、一足飛びに春がやって来るような気がしていた。
東京に住んで四年目、都会地の季節の移り変わりに岳男はすでに慣れた。
だが、一つだけ、岳男にとって、気がかりのことがあった。
彼の生れ育ったのは富山・黒部ダム湖畔の千の平小屋という山小屋風の民宿だった。いまも父親は、立山の山々に登るアルピニストたちのために細々と山小屋を守っている。
四月二十一日
この日の夜になると、彼は毎年、同じ内容の妖夢を見、魘（うな）された。
中学二年生の頃からのことで、もう十年以上も岳男はこの夢の虜になってきた。今年もまた？彼はすでに怯えていた…。
父親、小矢部吾平は自身も山男で、北アルプスの山々は大低、登撃（とうはん）しており、千の平小屋は立山連峰登山を目指す者たちにとっては、利便の地であった。
昭和三十八年に通称クロヨンダムと呼ばれている黒部ダムのすべてが完成、今世紀最大の難関工事と言われた発電所が稼動を開始した。当時、岳男はまだこの世に産声を上げていない。
岳男が初めて 妖夢 を見たのは、父親から妙な話を聞かされたせいだった。一見、昔話風に父親は岳男

に語ったが、話が黒部ダムに関する妖異譚（ようい
ん）だったので、ダムが建設された年月を考えれば、
年古（ふ）りた話とも岳男には思えなかった。人造湖
、黒部湖には人柱が立てられた？
父親は、あくまでも仮定の話だがと、前置きして、
黒部ダム建設の難事業達成のために、多くの犠牲者が
出たことを少年だった岳男に話をし、いくつかの、世
間に伝わる人柱伝説について、父親なりの見聞録を語
った。
黒部ダム建設とて例外ではないというふうに父親は
岳男少年に話して聞かせたのだ。
その話を聞いた十二歳の日から、十五年が経ち、い
ま、岳男は二十七歳の青年になっていた。
初めて妖夢を見たのは、残雪なお深い四月二十一日
のことで、父親から話を聞かされた翌日の夜のことだ
った。
次の年にまた同じ夢を同じ日に見たことで、それ以
来、岳男は四月二十一日という日を特別に意識するよ
うになった。
（今年もまた、同じ夢を見るのではないか？）
たぶんに、暗示にかかってのことに違いなかったが
、大人になったいまも、岳男は　妖夢の呪縛（じゅば
く）を解きほぐせないでいた。
四月も半ばを過ぎると、彼はすでに怖れの気持ちを
持った。強迫観念に自分が取り憑かれているのがわか
った。
これまで誰にも、夢の中味については話をしないで
きた。誰かにいっそのこと打ち明けてしまえば…と彼
は考えたこともあったが、秘密めいた夢の中味を他人
に理解してもらう白信は彼にはなかった。
小矢部岳男は、大手建設会社金子建設・東京本杜の
設計部に在籍していた。大学は建築学科を出た。
一流の設計技師になるのが彼の夢だった。

設計技師を志すぐらいだから、彼は万事、几帳面（きちょうめん）な性格だった。
父親の影響で、彼もアルピニストの一人、大学でも山岳部に身を置いた。体も頑健だし、精神の ほうも近頃の軟弱な若者にくらべたら、彼は一本、筋の通っているほうだった。
その彼が…。他人に愚にもつかぬ〈妖夢の話〉をするなど考えられないことだった。が、夜の時間を一人で迎えるのが苦痛で、四月二十一日の当夜、岳男は同僚を誘い、街に繰り出し、赤ちょうちんの屋台で酒を飲んだ。
酒には強い岳男だったが、いつもより、酒の量 過ごし、何軒かはしごをしたせいもあって、東京・練馬区大泉学園町にある自分のマンションに着いたときはかなり酔い潰れていた。
やっと同僚に背をかかえられて、岳男は自室に運び込まれた。
「おい、大丈夫か？」
同僚の声を耳にしたような気がしたが、彼は帰り着くなり、ベッドに身を投げ、そのまま、寝入ってしまった。前後不覚の状態だった。
夜半のことである。彼はのどの渇きを覚えた。
が、半覚醒の状態で、体のほうはベッドに張りついたままだった。白い、おぼろな闇が、瞼の裡にすでに浮き上がっていた。〈妖夢〉を見るときは、決まって、闇とも、白明の世界とも知れぬこの定かならぬ幽明境が初めに仄（ほの）見え始める。
ただ一面の黒い湖面はっきりとあらわされるのではなかったが、黒い湖面は、岳男が子供の頃から見慣れてきた黒四ダム（黒部湖）にちがいなかった。
「うーん、ううーっ…」
岳男は呻き声を上げた。
その自分が発している声に目覚めさせられている

ようで、彼は自分の呻きの声を聞き分けていた。
黒い湖面と見えた闇の世界に、微かに風が立ったようだった。湖面をわたる漣（さざなみ）を、彼の眼は捉えていた。
が、それもわずかの間で、風の立った水面が荒れ始めた。見る間に、水面は切りもみ状の状態を呈し、湖の底にと深い穴を穿（うが）ち始めた。
（あっ、いっもの悪夢が……）
その思いを新たにしたときは、もう、遅かった。十数年、同じ日の夜に見続けて来た夢がまた今年も再現されようとしていた。
怖ろしさが先に立った。
夢の中で、岳男の体は、水面に投げ出されており、急な瀧下りの場所に吸い寄せられて行くように、体がきりもみ状になり、魔の穴に引き付けられて行く。いまは一枚の木っ葉にしか過ぎなかった。
「救けてくれ！おれは…」
そう叫んでいたが声にはならない。
黒い渦巻きの中心部に、抗（あがら）う術もなく、岳男の体は呑み込まれていった。
誰かが、彼の両足を水中にと引き込む。
地獄の底に落ちて行くような恐怖感に、岳男は半ば気を失いつつあった。いや、いっとき、気を失っていたのかも知れない。
岳男は湖底の深みにはまったまま、波の柱に弄（もてあそ）ばれた。夢というのは脈絡のないもので、意識がもどったときは、岳男は第三者の眼を持った観察者の立場にいた。
眼の前で起きている怪異現象の一部始終を、別の自分が眺めているといった設定である。
先程まで、地獄の底で体をきりもみ状にされていたのに、彼は暗闇に眼を凝らしていたのだった。

恐怖感に体がすくんだあとは、幻想の世界にと彼は引き込まれていた。
いまは、恐怖感はなく、不思議な光景に彼は魅入られていた。
どうやら彼が引きずり込まれた波の柱は、湖面上の東西南北の位置に一つずつ、合わせて四本あるらしく、いまは、白い波頭を竜巻のように湧出（ゆうしゅつ）させていた。
やがて…白い波の柱はおさまり、湖面は静かになった次に岳男が見たものは幻想的なった。
妖火の世界だ。
無数の蛍の群れを思わせる青白い光が立ち、揺れている…いや、その青い妖光の塊は鬼火なのかも知れなかった。
四匹の鬼？青白い光の輸は、岳男の夢の世界の中では人形（ひとがた）にも見えていた。
四つの青白い光は人魂のように、正体もなく、ゆらゆらと燃え立っていた。
…カメラレンズがズームアウトされて行くように、妖（あや）しの光体は小さな点になり、彼の夢の視野から遠ざかって行った。
暗い湖面だけが見えた。
それを見ている岳男は、ふーと息を吹き返した。体は不動金縛りの状態にあったが、心の恐怖感は取り除かれていた。
ベッドの上で彼は眼を覚ました。
暗い部屋の天井を見た。独身者用のワンルームの空間に彼は居り、現実の世界に連れもどされていた。
（四月二十一日？おれにとって、やはり、この日は呪われた日なのか？
岳男はひとり呟く。

ベッドを離れ、台所に立つと、コップに水を充たし、一気に飲み干した。
頭の芯がズキンズキンと痛む。
酒の呑みすぎのせいではなかった。妖夢を見たあとは、決まってこの症状に襲われた。
「何の因果でこんな夢を見る？黒部人柱伝説？おれに一体、何の関係があるのだ。おれは、黒部湖の畔（ほとり）の山小屋で育った。ただ、それだけのことじゃないか」
あらためて岳男は怒りの文句を吐いた。
それに、父親吾平に問いかけたい思いにも駆られた。父親から聞かされた話と関係がある？そのように岳男は自已解釈を強いてきたが、夢に取り憑かれている自分の弱さを父親に見せるのが嫌で、これまで、黙って過ごしてきたのだ。
やがて、小矢部岳男は、自分の見続けてきた夢の意味するものを知ることになるのだが…。
いまは、まだ若者らしく、小矢部岳男は　悪夢に苛（さいな）まれている弱い自分を責めていた。